

意味論は不要なのか？

三木那由他

京都大学

Recanatiは意味論的に決定された内容という概念が不要であるという指摘をし、言語解釈のあらゆる場面に語用論的要素が関わるという文脈主義を掲げた。文脈主義によると、純粋に意味論的なプロセスや純粋な意味論的要因だけによって決定される言語的内容なるものは否定される。結果的にこの立場は、従来の意味論という学問分野そのものへ疑念を投げかけられるものと考えられる。

だがRecanatiの議論は決して決定的ではない。彼が文脈主義を擁護するのに持ち出す議論は、言語的意味に関する一定の見方を前提としている。それは真理条件（ないし命題）や指示対象といった外延を言語的意味の中心と取る見方だ。Recanatiの議論は、表現のこうした外延が純粋に意味論的には決定されないというものなのだ。

彼の議論が正しければ、外延を意味の中心的概念とする意味論は危機にさらされるだろう。だが形式意味論の伝統を振り返ってみるなら、そうした考え方が決して唯一のものではないということがわかる。形式意味論においては言語と世界との関係を扱う外延的(denotative)意味論とともに、発話を受け取る際に言語使用者が得る心的表象を記述しようとする表象的(representational)意味論というアプローチが存在している。Recanatiの議論がもっぱら外延に関わっている以上、明らかに彼の議論は少なくとも直接的には表象的意味論を切り崩しはしない。

では、表象的意味論が扱う現象は純粋に意味論的なのだろうか。それとも結局のところ語用論的なのだろうか。本発表では表象的意味論の一種であるDRT(Discourse Representation Theory)を具体例として掲げ、その典型的な分析を紹介する。そしてこの理論と意味論・語用論論争との関係を考察し、純粋に意味論的な内容が確保される可能性を探る。